

にしてくれる状態なのです（サム上三・四）。

四番目の、そして最後の定義としては、自分の心を統一するとは、目覚めるといふことです。

心の統一ができていない人間からは独特な感じを受けることも稀ではありません。その人は常に何かに向けて緊張しています、何らかの目標への途上にいます、何らかの企てに携わっています——ところが、この緊張が緩むや否や、その人はたちまちにして空虚になり、生気をなくしてしまします。その人を捉えている対象がなくなったとき、その人を前進させる推進力がなくなるとき、その人を魅了している刺激がなくなるとき、その時には活動性全体が崩れ去ってしまい、奇妙な荒廃が出来上がります。外向きのあの忙しなさや内奥のこの無気力とは明らかに共属しているものです——激しい情熱の人が冷い心の持ち主であることが屢々あるにも似ています。否、あの忙しなさの下には既にこの無気力が横たわっていて、あの忙しなさという刻印を規定しているのです。それに対して、自分自身の中へと自己を集中して統一し、静かになり、深みの中へと入っていく能力のある落ち着いた人間は、内的にも目覚めています。落ち着きという状態と内的な覚醒という状態も、同じように互いに共属しあい、担いあい、規定しあっているのです。

したがって、心を統一し、落ち着きを取り戻し、現実とその場にいる者となる人は、内奥にある重荷と苦悩をも超克します。その人は立ち上がり、軽やかになり、自由になり、晴やかになります。向かうべき諸対象に生き生きと立ち向かっていくことができるように、注意力を目覚めさせます。はっきりと視線を定め、ちゃんと見ることができるよう、内なる両眼の曇りを払いま

す。心構えを呼び出してきて、出会いが可能となる状態を備えます。

心の統一^①は他の無数の個別行為と同列に置いてよいような普通の個別行為ではなく、内奥の正しい状態そのものであり、人間と事物に対して正しい関係を持つことができるように人間をしてくれるもののものであります。ですから、心の統一の本質は極めて多様な出発点から出発して定義することのできるものであり、これまで述べてきたことも、その豊かな充満の中から幾つかを例示するものでしかありません。

心の統一^①ということを実行することは簡単ではありません。最初のいくつかの助走のあとで、興味も失せ、そのうえ内面の混濁がともに明瞭になってきてもいる場合などは、特にそうです。けれども、それは単に難しいなどということ以上のことなのではないのでしょうか？　そもそも可能なことなののでしょうか？　わたしたちは外的、内的な諸作用という織物の中に極めて密接に織り込まれてしまっているために、わたしたちにできることは、あるがままの現実のままでいることだけであって、もっと大きな統一^①といったものが徐々にではあっても出来上がっていくかどうかは、成り行きに任せる以外に仕方のないことなのではないのでしょうか？　心を統一しようとする試みなど、自分の髪の毛を引っ張って底無し沼から抜け出ようとものがくあの男性の試みにも似たものなのではないのでしょうか？^(訳注 5)　その人は、自分自身の中にいると同時に、自分の外にもいて、自分自身を掴むことができるための足場が自分にはあると前提しているのではないのでしょうか？　この問いは異様と聞こえますが、この問いは正当な問いです。しかも、この問いには肯定をもって答えねばならないのです。というのは、実際にペルソナの本質とは、自分自身の中にも、

自分の外にも存在していることなのです。つまり、自分を抜け出て成長していくと同時に、自分を手中に収めてもいることにあるのです。自分が存在していると同時に、自分自身の中から再び開始していくこともできることにあるのです。このことがどのようにして進行していくのかを、わたしたちはここで解説することはできません。なぜなら、そのためには、人間の本質についての問い全体を繰り広げねばなりませんから。わたしたちはむしろ次のように言うことにします。「信じなさい。そして、勇気を出してやってみるなら、実際にそのようになるということをあなたも覚(覚悟)ることになります。あなたが踏みしめることになる秘密に満ちた点、そしてそこからあなた自身を手中に収めることもできる秘密に満ちた点がそこにはあります。この一步を踏み出してみなさい。そうすれば、あなた自身がその点を実際に感じ取るようになります。否、ここで問題になっているのは、単にひとつの点であるだけではなく、ひとつの力でもあります。それは、絶えず変遷していくもの、逃げていくもの、溶けてなくなっていくものとは別のものです。それは本質的なもので、永遠の価値を持っているものです。あなた自身がそのもの、あなた自身の本来のものなのです。その点からなら、あなたの忙しなさを落ち着きと静けさへと変えることが、場所を掴みとって現実とその場に現在する者となること、ありとあらゆる方向に向けて散り散りになっているものを一つにすることが、重荷となっているものを解き放ち、無力な重苦しさを晴れやかにすることが、あなたにもできるのです。」

この意味での心の統一をもって祈りは始まらねばなりません。心の統一は簡単ではありません。

わたしたちが所有している統一の度合がどの程度のものかは、わたしたちがこれをしようと本気で努力してみるとき、初めて気付くことになります。落ち着きを得ようとわたしたちが試みるや否や、その時こそまさに、落ち着きの無さがわたしたちをまともに覆ってくるようになります——それは、毎夕、眠りに就こうという気になると、日のある間はずいぞ見せたこともなかったような権能で、あの気掛かりなこと、あるいはこの願望がわたしたちを襲ってきたりすることに似ています。わたしたちが実際にその場にいる者となろうとすると、まさにその時こそ、自分たちがどれほど激しくありとあらゆる方向へと連れ去られていっているのか気付くことになります。わたしたちが統合されたものと、自分自身に対して権能を行使できるものとなろうとするや否や、その時こそ初めて、散漫とはどういうことなのかをわたしたちは体験することになります。そして、わたしたちが、聖なる対象のために目覚めたものとなりたいたと、受入れ態勢をつくりたいと思うと、わたしたちは、わたしたちの心情、気持ちの低い方へと引っ張る無気力な重苦しさを実際に心で感じとるのです。けれども、この一切は変えようのないことです。そして、わたしたちはこのことに持ち堪えねばなりません。そうしないなら、わたしたちが祈ることを学ぶことは決してありません。

全ては心の統一に掛かっています。心の統一に向けられる努力が無駄骨に終わることはありません。そして、心を統一しようとするだけで祈りのための時間が全て過ぎてしまったとしても、その時間は善い使われ方をしたことになるでしょう。というのは、基本的には、心を統一するということが既に祈ることなのですから。そう、落ち着くことができない時、病気の時、疲労

の激しい時などには、この「心の統一」という祈り」だけで満足しておくことが、為になることも時としてはあります。そうすることが落ち着きを与え、強め、助けとなってくれるのです。ところで、もし誰かが差し当たっては、この関連で自分がどれ程酷い状況にあるかをちゃんと見ることで、もし以外には何も達成するところがないとしても、それでもその人は既に何かを獲得することはしたのです。すなわち、或る意味でその人は散漫ということの背後にあるあの点に触れることはした筈なのですから。

祈りの空間

心の統一によって、祈りのための空き、あの内的な空間が成立します。ただし、空きとか空間とかいった命名は本来はあまり正しいものではありません。というのは、この空間は「物質的身体的な意味で」外にあるのでも、内にあるのでもなく、「霊の中に」あるものですから。それも、全く普通の意味での霊の中に、つまり、思考作用における形象や意志作用における意図が存在しているところにあるのではなく、「聖霊の中に」あるのですから。この空間は、諸々の事物が存在する場となっている物的空間や、様々な表象が存在する場となっている意識空間のように自ずから既に存在しているものでもなく、神と向かい合うなかで初めて成立してくるものです。それは、二人の人間が真の意味での「わたしとあなたという間柄」において互いに向かい合うやいなや、ただちにその二人がその中にいることになるようなあの空間、二人だけのあの特別な世界

に或いは似ているのかもしれませんが。すなわち、この空間は二人が互いに相手に対して抱き合っている敬意とか、畏敬とか愛などと一緒に成立もし、過ぎ去りもするものです。そして、これらの思いと同じ広がり、同じ深みを持ってもいるものです。神が来られて、この人間のところにおられ、愛のうちにこの人間のほうを向いておられる。そして、この人間も神の前にいて、信仰のうちに神のほうを向いている——これがここでいう聖なる空間なのです。

本来は、心の統一によって内的な空きができる、そしてこの空きができるや否や、祈っている人間は直ちに「神がここにおられる」という言葉を発することができる、と言ってもよいのかもしれませんが。ところで、このように「まず」と「その後で」に分解されるのはわたしたちの思考作用によってでしかありません。実際には、心を統一すること、聖なる空間が空くこと、神がここに₁₁おられること、そして人間が神の前に立っていることは、一つの全体を構成しています。否、そもそも人間が心を統一することができるのは、神がその人のほうを向いてくださるからではないのです。その人があの聖なる意味において、「はい、わたしはここにいます」〔サム上三・四〕とすることができるのは、神が、その人のことを念頭に置きつつ、現にその場におられて、その人にその場所を指し示しておられるからでしかありません。この生ける空間を自らの来臨によって創り出しておられるのは神であり、人間はこの空間を心の統一によって発見し、そして心を統一している間は、その空間の中に立ってもいるのです。その人間が属している場所であるとともに、自分自身をも世界をもその本来の姿において見出す場所、そして、呼ばれることも、答えることもそこで行われることになる筈の場所でもあるこの聖なる場所を規定しておられるのは

神です。けれども、わたしたちの思考が混乱を来さないためには、わたしたちはこのただひとつのものである全体を分解してみなければなりませんのです。

従って、心を統一するということは、人間が「ここに神が、啓示の中で言及されているあの生けるお方、あの聖なるお方がおられる。そして、ここにわたしもいる。」とすることができるという意味を持っています。ところで、ここにいるのは、日常の生活におけるあの曖昧で定まるところのない意味しか持っていない「わたし」、つまり、家でテーブルに着いたり、町中のあれこれの通りを抜けて行ったり、オフィスで自分の仕事をしたりしているあの混濁した何者かではない「わたし」ではなく、本当の意味でのわたしです。わたしという現存在に対して責任を負っている者であるあの者がここにはいます。そのあらゆる貧しさと惨めさにどっぷりと浸かりつつも、それでも尚、それぞれが、このひとりの者であり、かけがえなき者であり、その人の代役をつとめることは何びとにもできない者であり、神がわたしを創造されたときに、はっきりと念頭に置いて創造してくださったその当の者であり、「神、そしてわたしの魂、このふたり以外には何も世界にはない」^(冥注)という言葉が当てはまるその者がここにいるのです。そもそも、この意味でのわたしが目覚めるということは、神の前においてしか起こらないことなのです。

神の前では、人間に与えられているもののうちで、神に答えるべきものとして神ご自身が自らのためにと指定しておかれたもの、すなわち、宗教的な深層も目覚めてきます。人間は単に自分の力を様々に用いることだけで生きているのではなく、人間という生ける存在の様々な本質層にもとづいても生きています。どうしてもよいような問いのための情報、職業上の重大な困難故の心

労、偉大な芸術作品から受ける震撼^{しんかん}、そして愛する人に対する忠実、これらはいずれも、本来のものにまで至る領域層のうちのそれぞれ自分たちよりも深いところにある領域に発しているものです。これらの領域は自分から勝手に動き出せるわけではなく、これらの領域に対応する対象がこれらの領域を目覚めさせるとき、初めて身じろぎを始めます。かなりの数の領域は、自分の中で何が生きているのか、自分の能力がどういうことのためのものなのか、呼び掛けを受けるまでは全く知らずにいます。宗教的な深層もそうです。宗教的深層が答えるのは、諸事物の背後にある秘密に対して、出来事の中の隠れた意味に対してです。地上にありながらも、地上に起因するものではないものに対してです——そのものとは、創造し統宰しておられる神の絶えざる自己証言であります。神の自己証言との接触によって目を覚まされ、その呼び声に導かれて、宗教的深層はあの方ご自身を求め探していくのです。そして、そうしていくことが宗教です。ところで、神が表現的に語られるまでは、この呼び掛けは不確かであり、混乱していて、錯覚に満ちたものでした。すなわち、まずはご自分の使いを通して、そしてその後ご自分の息子、イエス・キリストを通して表現的に語られるまでは。人間が信頼をもって自らをあの方に任せ切るとき、その人は本当に神の前に達します。ちゃんとした指導を受けている祈りにおいては、このことが現実的に起こります。そこにはあの聖なる向かい合ひがあります。この向かい合ひの中で、普通の宗教的な深層ばかりではなく、生まれ変わった新たな宗教的深層が、恩恵によって形成された心、神の子供の心が内奥において目覚めるのです。

この空間の中で神の現実が身を起こしていきます。

人間が神の現実を直接に感知するということ、そしてその結果、神の現実がその大いなる権能をもって人間を揺さぶり、その近さをもってその人を溺れさせるということも、ありえないことではありません。その場合は、その人は祈りのこの偉大にして親密なる秘密を経験していることになります。その人はこの秘密を畏敬のうちに受け止め、大切にすべきでありましょう。けれども屢々、そののみかむしろ大抵の場合は、そうはならず、一切は静寂のままです。あの方が「ここに」おられると、祈っている人が自らに言っただけで聞かせたその神は暗闇の中に留まったまま黙しておられます。そして、その場合には、祈りは、信仰に担われて、この黙している暗闇の中へと入って行き、そこで頑張り抜かねばならないのです。

祈っている人は、心を統一しているなかで、「ここに神がおられる——そしてここにわたしもいる」と言います。このことを実際に実行しようとするとき、ひとつの極めて重要な意味状況をその人は覚えることになります。すなわち、その人は「ここに神がおられる」と「ここにわたしがいる」という二つの文章において「いる」という語が別々の意味を持っていることに気が付きます。いる、ある、存在する、おられるという語におけるこのような語義の相違ということは、自然の生命においても既に当っていることがあります。誰かが、「この部屋にあるのは——いるのは？」と尋ね、わたしが「真ん中にはテーブルがあり、窓のところにはバラが咲いていて、絨毯の上には犬が腹這いになってい、わたしの前には友人が立っている」と答えるとき——この

場合、わたしはこれら様々な事物や生き物全てについて、それらが部屋に存在する、と言ったことになります。

けれども、それらは同じ仕方では存在してはいないわけではありません。生きていて成長もする植物はテーブル以上のものですし、存在する仕方でもテーブルとは別です。わたしを見知っていて私の呼び声に答える犬の存在はもう一段強烈ですし、存在する仕方でも別の新たなものです。そして、認識し愛することのできる自由と尊厳を持っている人間の権能性はさらに強く、在り方もまた別の新たなものです。そして、人間たちは人間たちで、現にその場にいるという同じことにおいても別々の権能性と在り方を持つことがありうるのです。誰かが部屋に入ってきて、そこにいるとします。ただし、ただそれだけのことで、他の人がその人との関わりで何かしなければならいとしても、せいぜい、その人を迂回して通らねばならないということだけという存在の仕方もあります。別の人は、誰かがそこで話をしようとするかぎり、その人のことを考慮に入れざるをえないような仕方です。第三の人は、現にそこにいるというだけで、その場にいる人々の中心になっているかもしれません。この相違は、ここで言わんとしていることにわたしたちの注意を喚起するものです。神は、他の何物も、他の何びとも同じ仕方では存在していない或る仕方では現にここにおられるのです。

神が存在しておられるのは、ご自身のみ起因してであり、ご自身のみによつてです。ですから、神おひとりのみが本質に固着した仕方、そして本来の意味で存在している方です。聖書はこのことを神は「主」であると説明するという仕方では表現しています。神は、権能を振るうため

の対象となる諸事物が存在することによって、初めて主となられるのではなく、神は自分で自身の主でいらっしゃいます。まさに本質からして、主としての権能を持っておられ、君主として君臨しておられるのです。それに対して、わたしがいるのは、わたしに起因してでも、わたし自身によってでもなく、神によってです。わたしの本質に固着した仕方のおかげではなく、神の恩恵の故にです。本来の意味においてではなく、分け前に与かるという意味においてです。わたしの存在と、神の存在との間には、両者を繋ぐ「とーそして」は基本的には全く存在しません。「神とわたしがいる」という文章は意味をなさない文章なのです。わたしが本気でこの文章を堅持しつづけようとするなら、わたしは冒瀆を吐くことになるであまりましょう。わたしの存在するは、神の存在するに対しては、被造物の存在するが被造物仲間の存在するに對するとは別の關係にあります。すなわち、わたしは単に「あの方のみ前で」しか、そして「あの方によって」しか、存在していないのですから。

心の統一をちゃんと実行していくとき、徐々にその人はこの真理を覺っていくことになります。自分が「神の前に」いる——神の前においてしかないものではありませんが、神の前では実際にいる——ということが分かるとき、人は大切なことを学んだことになります。神の前にいるということは偉大なことなのです。驚愕させるようなことかもしれませんが、極めて幸せにしてくれることでもあります。そして、わたしたちが見ていくことになるように、祈りの根本行為のうちのひとつ、すなわち礼拝はこのことに答えるものなのです。